

④研究集会・講座等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
第37回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会（企11）	企画情報部	65
平成25年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）（企10）	企画情報部	66
第8回無形文化遺産部公開学術講座（*無01）	無形文化遺産部	67
無形民俗文化財研究協議会（*無02）	無形文化遺産部	67
文化財の保存環境に関する研究会（*保修03）	保存修復科学センター	68
文化財における伝統技術及び材料に関する研究会（*保修06）	保存修復科学センター	68
近代の文化遺産の保存修復に関する研究会（*保修07）	保存修復科学センター	69
総合研究会（企）	企画情報部	69
企画情報部研究会（企）	企画情報部	70

- *注
- ・第8回無形文化遺産部公開学術講座は、無形文化財の保存・活用に関する調査研究（①無01）の一環として実施した。
 - ・無形民俗文化財研究協議会は、無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究（①無02）の一環として実施した。
 - ・文化財の保存環境に関する研究会は、文化財の保存環境の研究（①保修03）の一環として実施した。
 - ・文化財における伝統技術及び材料に関する研究会は、伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究（①保修06）の一環として実施した。
 - ・近代の文化遺産の保存修復に関する研究会は、近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究（①保修07）の一環として実施した。

第37回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会 「「かたち」再考—開かれた語りのために—」(④企11-13-1/1)

文化財の概念が多様化している昨今、いかに文化財の魅力的に伝えていくかという問題は大きな課題となっている。企画情報部では、西洋から受容した、近代的な「美術」や「美術史」の枠組みを解きほぐそうという意図のもとに、美術・考古・建築のみならず、芸能・文学といった「かたち」がないとみなされるものも考察対象に入れて「かたち」をとらえ直してみようと試みた。本シンポジウムの成果の一つとしては、近代になってから絵画・彫刻といったジャンルに分類されたものを、相互につながっていた本来の姿に、いかにもどすべきかという課題が浮かび上がったことが挙げられる。

1月10日(金)は趣旨説明・基調講演(対談)・セッション1で4名の研究発表、11日(土)は、セッション2・セッション3でそれぞれ4名の研究発表を行った。最終日の12日(日)は、登壇者全員と専門委員とでラウンドテーブル形式のディスカッションを行った。参加者へのアンケート調査では、「大いに満足」70.8%、「満足」25.0%、「普通」4.2%、「普通」0%、「無回答」4.2%という結果であり、回答者の過半数に満足感を得たことが判明した。

日程：2014(平成26)年1月10日(金)～12日(日)、会場：東京文化財研究所 セミナー室
参加者は1日目134名、2日目126名、3日目52名(含：発表者)であった。

[プログラム]

趣旨説明：「今、なぜ「かたち」なのか」 皿井舞(東京文化財研究所)

基調対談：「生まれてくる〈かたち〉」 イケムラレイコ(アーティスト)・田中淳(東京文化財研究所)

【セッション1】群れとしての「かたち」：セッション趣旨説明 江村知子(東京文化財研究所)

サイモン・ケイナー(セインズベリー日本藝術研究所)

「先史時代からみた「かたち」の概念—土偶や縄文時代の遺物の観察を通して」

高桑いづみ(東京文化財研究所)「「くり返す」ということ—音楽の「かたち」と変化する伝承—」

ユキオ・リピット(ハーバード大学)「蟠龍図の「かたち」と行為」

小沢朝江(東海大学)「近代日本の行在所にみる様式の創造」

セッション討議 司会：江村知子(東京文化財研究所)、荒川正明(学習院大学)

【セッション2】個としての「かたち」：セッション趣旨説明 塩谷純(東京文化財研究所)

小林達朗(東京文化財研究所)「美しい術—国宝千手観音像の場合」

内呂博之(金沢21世紀美術館)「「かたち」への挑戦—岡田三郎助と藤田嗣治」

大島徹也(愛知県美術館)

「ポロックをポロックとして見る—ジャクソン・ポロックのオールオーバーのボード絵画」

渡部泰明(東京大学)「歌の〈かたち〉—源俊頼の方法」

セッション討議 司会：塩谷純(東京文化財研究所)、藤川哲(山口大学)

【セッション3】「かたち」を支えるもの：セッション趣旨説明 綿田稔(東京文化財研究所)

メラニー・トレーデ(ハイデルベルグ大学)「八幡縁起のローカリゼーション」

崔公鎬(韓国伝統文化大学校)「器—社会的形態・文明の記憶」(通訳：稲葉真以/韓国光云大学)

塚本麿充(東京国立博物館)

「中国絵画史における「人格」と「かたち」—呉彬「山陰道上図巻」と価値評価の構造」

桑木野幸司(大阪大学)

「記憶のかたち—コスマ・ロッセッリ『人工記憶の宝庫』(1579年)における天国と地獄の表象」

セッション討議 司会：綿田稔(東京文化財研究所)、佐藤直樹(東京芸術大学)

【ラウンドテーブル(総合討議)】 司会：田中淳、山梨絵美子(以上、東京文化財研究所)

平成25年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）（④企10-13-3/5）

第47回オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」

企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に開催しており、本年で47回目を迎えた。昨年度同様、本年度も金曜日と土曜日の午後、2日間連続で開講し、聴講者の便宜を図るように努めた。「モノ／イメージとの対話」をテーマに掲げ、個々の講演内容は以下の通りである。なお、この講座は、「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。

今回は2日間でのべ207人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、185人から回答を得た（回収率：89%）。満足度に関する回答結果は、「たいへん満足した」77人、「おおむね満足した」81人、「普通だった」12人、「不満が残った」6人、無回答9人、回答者の85%が満足感を得たことがわかった。

第1日：2013（平成25）年10月4日（金）13：30～16：30、東京文化財研究所 セミナー室

- ・小林達朗（東京文化財研究所）「平安仏画の表現—虚空蔵菩薩と千手観音像—」

平安時代・12世紀、日本の仏画は、微妙な色彩の変化と金銀箔をきわめて細く切った截金による繊細な文様表現による独特の美しさを実現した。東京文化財研究所では、東京国立博物館との共同調査により、同館所蔵の平安仏画の高精細画像による共同調査を行っており、本講演では二つの国宝仏画からこれまでに得られた調査成果の一部をご紹介します。細部を観察できる高精細画像の意義、またそこから考えられる美術史的問題、ことに平安仏画における金銀の使用法と絵としての表現の関係について考察した。

- ・鄭于澤（東国大学校大学院教授・同大学校博物館館長）「高麗仏画の表現—凝縮された美—」

韓国における仏画は、14世紀を中心とする高麗時代後期に制作された作品が比較的多く現存し、独特の美しい世界を見ることができると言える。その衣服の表現には、金泥を使った細密な文様、多種多様な装身具が描写されるが、それ以外の部分には限られた種類の顔料で描くという特徴がある。この顔料の単純さは金泥をよく生かし、効果を極大化しようとする意識につながっている。画面全体に神秘的なまでの雰囲気がかもしだす高麗仏画の表現が、どのように構成・実現されているのか、詳細な画像を中心に歴史的見地も交えて紹介した。

第2日：2013（平成25）年10月5日（土）13：30～16：30、東京文化財研究所 セミナー室

- ・小林公治（東京文化財研究所）「螺鈿を訪ねて西へ東へ—5000年の世界史を探る—」

メソポタミア文明や中国文明の出土品を最古の事例とする螺鈿は、唐時代以降、東アジアの中国・韓国、そして日本で発展を遂げた。しかし近年、これら以外の沖縄や、ベトナム・タイ・カンボジアなどの東南アジア、そしてインド、トルコ・シリアなどの南・西アジアにも存在することが明らかとなり、さらにアジアの影響を受けた西ヨーロッパや、南太平洋・北アメリカ北西海岸にも独自の発想らしい螺鈿が存在することが判りつつある。本講演では、世界各地の螺鈿を紹介しながら5000年の螺鈿史について考察を行った。

- ・二神葉子（東京文化財研究所）「世界遺産—現状と問題、将来像—」

1972（昭和47）年に世界遺産条約が成立して以来、世界遺産リストに記載された資産は1000近くになる。2013（平成25）年は富士山が記載され、正式決定前から連日報道が行われたが、世界的にも世界遺産への関心は高いものがある。しかし、そのために世界遺産が国際問題を引き起こし、国際紛争に巻き込まれ損傷を受けることさえある。世界遺産の現状と問題、その将来について、2013年カンボジアで開催された世界遺産委員会の様子とともに紹介した。

第8回無形文化遺産部公開学術講座（①無01-13-3/5の一部として実施）

10月5日、東京国立博物館平成館大講堂において、当研究所所蔵の昭和初期に吹き込まれた上方落語のレコードの復元再生をめぐる公開学術講座を行った。タイトルは「ニッソー長時間レコード―昭和初期上方落語の口演記録―」。入場者数126名。

プログラム

- 講演1 飯島満（東京文化財研究所）「特殊再生装置を要する音盤」
- 講演2 大西秀紀（京都市立芸術大学）「ニッソー長時間レコード」の再生
- 講演3 中川桂（二松学舎大学）「上方落語の特質と戦前の動向」
- 講演4 岡田則夫（大衆芸能研究家）「ニッソー長時間レコードに聴く昭和初期の上方落語」

無形民俗文化財研究協議会（①無02-13-3/5の一部として実施）

無形文化遺産部では、無形民俗文化財の保存・継承に寄与することを目的として、毎年無形民俗文化財研究協議会を開催してきた。第8回にあたる本年度は、「わざを伝える―伝統とその活用」として、これまであまり取りあげられてこなかった民俗技術を中心テーマに据え、その保護・活用について報告・総合討議を行なった。その成果は報告書として刊行した。

日 時：2013（平成25）年11月15日（金）10:30～17:30

会 場：東京文化財研究所 セミナー室

参加者：115名

テーマ：わざを伝える―伝統とその活用

内 容：

【発表】

井藤博明（佐渡市世界遺産推進課文化財室）「佐渡『小木のたらい舟製作技術』伝承の取り組みと課題」

徳田光太郎（越中福岡の菅笠製作技術保存会）

「越中福岡の菅笠保全に妙薬はあるのか―行政のサポートについて」

浦里健太郎（台東区文化産業観光部産業振興課）「台東区の伝統産業事業について」

羽太謙一（女子美術大学）「えどがわ伝統工芸産学公プロジェクトの取り組みについて」

野尻かおる（荒川区立荒川ふるさと文化館）

「荒川区の無形文化財保護の取り組みについて―伝統工芸技術の保存・普及・継承事業を中心として」

【総合討議】

上記報告者と下記コメンテーター、コーディネーターによる総合討議を行った。

コメンテーター：段上達雄（別府大学）、山崎剛（金沢美術工芸大学）

コーディネーター：今石みぎわ（東京文化財研究所）

総 合 司 会：高桑いづみ（東京文化財研究所）

文化財の保存環境に関する研究会 (①必修03-13-3/5の一部として実施)

「文化財の保存環境の研究」プロジェクトでは、文化財の保存環境における汚染ガス対策の研究をおこなっている。これまでの研究成果を解説し研究の進捗状況を報告する研究会を開催した。文化財収蔵空間で使用可能な材料を選択するための試験法の試案、内装材料における放散ガス試験データを元におこなった濃度予測による空気環境制御の事例、博物館の省エネ化で検討課題となる文化財の保存環境への汚染ガスの影響について解説した。

日 時：2014（平成26）年1月27日（月）13：30～17：00

会 場：東京文化財研究所 セミナー室

参加者：外部からの参加者 93名

講演者：佐野千絵（保存修復科学センター）「趣旨説明」

古田嶋智子（保存修復科学センター）

「展示保存環境で用いられる内装材の放散ガス試験」

呂俊民（客員研究員）「展示保存環境の評価と濃度予測」

佐野千絵「展示ケース内空気環境の清浄化技術と評価」

総合討論

文化財における伝統技術及び材料に関する研究会 (①必修06-13-3/5の一部として実施)

平成25年度は、第7回「文化財建造物における木彫彩色の保存・修理・資料活用」の研究会を開催した。文化財建造物の外観や室内に荘厳された欄間や木彫などの彩色に関する保存修復科学的な基礎研究は金碧障壁画などの平面彩色に比較してあまり活発に行われてこなかった。しかし、三次元彫刻であるため劣化が著しい場合も多く、基礎的な調査や保存、修理の施工、さらには資料活用など、今後取り組むべき課題は多い。研究会では、このような文化財建造物の木彫彩色といかに向き合うべきかを考える上での具体事例として、瑞巖寺本堂欄間と日光社寺建造物群の木彫の調査・保存と修理・資料活用に関する諸問題を、Ⅱ部構成で実際に関係しているそれぞれの講師の立場から、最新の情報を提供いただいた。

日 時：2013（平成25）年9月26日（木）13：25～17：30

会 場：東京文化財研究所 会議室

参加者：53名

講演者：酒巻仁一（文化財建造物保存技術協会）「瑞巖寺本堂欄間の調査と修理」

運天弘樹（凸版印刷）・北野信彦（東京文化財研究所）

「資料活用をめざした光造形樹脂レプリカの作成」

佐藤則武・手塚茂幸（以上、日光社寺文化財保存会）「日光東照宮の彫刻彩色の保存と修理」

近代の文化遺産の保存修復に関する研究会 (①必修07-13-3/5の一部として実施)

平成25年度は、明治維新以降急速に普及した洋服、建築物や列車（御料車など）の室内装飾に使用された裂地などの保存と修復及び活用に関して、また、それまで服飾には使用されてこなかった材料を使った服飾品の保存手法等に関して、研究会を開催し、美術的な位置づけや技術的問題点に関する保存と修復手法について、保存修復に携わっている方々や専門家など海外において携わっておられる方々も招き、保存や修復に関する事例紹介を通じてその考え方や難しさを知るとともに活用方法等を討論した研究会を2013（平成25）年11月22日に東京文化財研究所セミナー室にて実施した。

第27回「近代テキスタイルの保存と修復に関する研究会」

日時：2013（平成25）年11月22日（金）10：30～17：30

会場：東京文化財研究所 セミナー室

講演者：中山俊介（東京文化財研究所）「近代テキスタイルの保存と修復」

石井美恵（東京文化財研究所）「近代におけるテキスタイル保存の変遷と現在の動向」

マリオン・カイト（ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館）

「テキスタイル保存修復の現状：ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館におけるテキスタイル、ドレス、アクセサリーの保存修復とマウント方法」

上山尚子（京都服飾文化財団）「1900年代頃のドレスの修復と収蔵品の保存について」

クリス・パウロシック（ロイヤルオンタリオ博物館）

「コスチューム・コレクションにおける合成素材」

総合研究会 (④企)

所内で開催する総合研究会は、企画情報部が担当する。各研究部・センターの研究員がテーマを設定してプロジェクトの成果を研究発表し、テーマに関して所内の研究者間で自由討論するシンポジウム形式を取っている。平成19年度より独立行政法人国立文化財機構に対し、総合研究会の案内を通知している。平成25年度は下記のスケジュールで実施した（会場：東京文化財研究所セミナー室）。

- ・第1回 2013（平成25）年11月5日（火）
発表者：岡田健（保存修復科学センター）「初唐仏教彫刻論序説」
- ・第2回 2013（平成25）年12月3日（火）
発表者：中山俊介（保存修復科学センター）「近代染織品の保存と修復」
- ・第3回 2014（平成26）年1月14日（火）
発表者：久保田裕道（無形文化遺産部）「無形文化遺産情報ネットワーク」
- ・第4回 2014（平成26）年2月4日（火）
発表者：境野飛鳥、江村知子（以上、文化遺産国際協力センター）「文化財保護制度に関する調査について」
- ・第5回 2014（平成26）年3月4日（火）
発表者：綿田稔（企画情報部）「文化財アーカイブズ構想について」

企画情報部研究会 (④企)

企画情報部ではほぼ月に1回のペースで美術史研究者を中心とする研究会を開催して、それぞれの研究やプロジェクトの成果を発表し、さらに討議によって充実を図っている。平成25年度の開催内容は下記の通り。

- 4月30日(火)「華族たちの写真同人誌『華影』と黒田清輝宛小川一真書簡」
斎藤洋一(神戸市戸定歴史館)「華族写真同人誌『華影』考」
田中淳(東京文化財研究所)「黒田清輝の写真観」
岡塚章子(江戸東京博物館)「黒田清輝宛小川一真書簡について」
- 5月28日(火)「四天王寺所蔵 六幅本聖徳太子絵伝をめぐる諸問題」
土屋貴裕(東京国立博物館)、村松加奈子(龍谷ミュージアム)、米倉迪夫(東京文化財研究所名誉研究員)
コメンテーター:石川知彦(龍谷ミュージアム)
- 6月5日(水) ※ミニシンポジウム
スタンレー・アベ(アメリカ・デューク大学)「『中国彫刻』を想像する」
コメンテーター:田中修二(大分大学)、岡田健(保存修復科学センター)
- 7月30日(火) 小林達朗(東京文化財研究所)「東京国立博物館蔵国宝本・千手観音像の表現」
- 9月24日(火) 植野健造(福岡大学)「新出資料紹介『第八回白馬会展覧会出品目録』」
- 11月26日(火) 染谷香理(東京芸術大学)「板本・桓齋著『画傳幼学繪具彩色獨稽古』及び、写本『彩色童諭』について」
- 12月6日(金) 佐藤全敏(信州大学)「観心寺如意輪観音像 再考」「補論1 左大寺古文書と造西寺所」「補論2 承和期様式(作風)の成立をめぐって」
- 2月25日(火) ミニシンポジウム「アート・アーカイヴの諸相」
加治屋健司(広島市立大学)「美術アーカイヴのなかの美術史」
上崎千(慶應義塾大学アート・センター)「アーカイヴと前衛—表現の非永続性ephemeralityと資料体」
橘川英規(東京文化財研究所)「中村宏氏作成ノートに残された記録と資料—観光芸術研究所、東京芸術柱展を中心に」
- 3月25日(火)「美術史料のデジタル公開を念頭に置いたWeb版『みづゑ』の研究と開発—『みづゑ』のウェブ公開と美術アーカイブへの展望—」
津田徹英(東京文化財研究所)
丸川雄三(国立民族学博物館)
橘川英規(東京文化財研究所)
中村佳史(国立情報学研究所)
吉崎真弓(国立情報学研究所)